インド留学記

その7

出版記念パーティ(1)

東方学院講師
駒沢大学講師
阿部慈園

1

一般の学術書の表紙には、本のタイトルと著者の名前がまずきて、それに出版社あるいは研究機関の名称がつづくのがつねですが、それだけでは無味乾燥にすぎると思い、少しく彩(いろどり)を添えることにしました。

はじめ、カヴァー・カットには好きな花の「クリシュナ・カマル」をと思いましたが、その絵あるいは写真が入手できなくて、「ブラフマ・カマル」(邦名・月下美人)にすることにしました。

アメリカから留学していたジム・レイン(現マカレスター大学助教授)を通して、カナダ人のアーティスト、ジャック・アンダースンに、そのイラストを頼みました。かれは一つ返事で「オーケー」してくれました。しばらくして、「ブラフマ・カマル」の草案がとどけられ、それをバンダールカル研究所のプレスに渡しました。いわば、汗顔ものの小著に、かれは「花」を添えてくれたのでした。

あとで、「謝礼を払いたい」といっても、
「そんなものはいらない。ぜひというのなら、家内とともに食事を招待して欲しい」
というだけです。一夕、わたくしはデッカン・ジムカーナのレストランにかれら二人を招きました。ミセス・アンダースンは、サンスクリット学者で、かれは奥さんのインド留学についてきたのでした。長身にして細身、飄飄として、まさに鶴のような男でした。

カヴァーの裏には、故秦慧玉禅師の詩の一句「渡水看花」を引用させていただきました。それに、"Over the Ocean, See the Flower"の英訳を添えました。

ちなみに、出版費用は、一八〇ページ、一、〇〇〇コピーで一一、九七〇ルピーでした。当時一ルピーは約三〇円でしたから、三六万円ほどになります。しかし、一年間のプーナ滞在費とその間二度の日本とインドを往復した渡航費を加えますと、出版に用した総額は二〇〇万円をゆうに越えていました。

2

研究所の所長R・N・ダンデーカル先生から身にあまる「序文」(Foreward)をいただきました。一九八一年二月四日付の序文の最終校正がすんだころ、事務長のB・N・パランズペー氏は、

「お世話になった先生方や友人たち、あるいは研究所の職員たちを招いて、出版記念パーティーを開いたらどうか。ただし、費用はお前もちで。二〇〇ルピーもわたせば、わしがすべてとりしきってやるよ」

といいました。

それはいい考えだと思い、さっそくかれの指示にしたがって、パーティーの準備にとりかかりました。招待状を作成して、まず、メイン・

ゲストであるP・V・パパット先生ご夫妻をたずねました。先生は大変喜んでくださいました。V・V・ゴーカレー先生や、プーナ大学サンスクリット科の主だった先生方のもとへも足を運んで、来臨をたのみました。

サンスクリット科のヘッドのS・D・ジョーシ先生に、お車代にあたる「リキシャ・チャージ」(たしか一〇ルピーだったと思う)を添えて、招待の意を述べましたところ、

「こんなものはいらないよ」

と、リキシャ代をつっかえすのです。

「いや、日本の習慣では偉い先生をお招きするとき、お車代をつけますので、どうかお受け取りください」

といいましたら、やっと受け取ってくれました。

3

一九八一年二月二五日、長年住みなれた研究のゲストハウスのメインホールで、出版記念パーティーが開かれました。約七〇名のパーティーとなりました。

開式の言葉が簡単にあったのち、わたくしは謝辞を呈するために立ちあがりました。

Respected Ladies and Gentlemen,
and my dear Friends ;

I am very glad for your kind presence today. When I first came to Poona, Nov. of 1974, I could not even conceive of the completion of my Ph.D. work, neither dream of its publication, because, at that time, in fact, I could not speak even one full sentence of English. Due to Prof. Bapat's solicitous guidance, however, and the warm encouragement of all of you here, I have come to this good day.

Having come over the sea to India, I am sure, I have seen this Brahma-Kamal Flower. My sincere hope is that between Poona and Japan, I might become one small bridge in the field of Indology.

Thank you.

〔尊敬する紳士淑女の皆さん、

そして親愛なる友人諸君。

皆さま方の本日のご来臨を、大変うれしく思います。わたくしは、一九七四年一一月に初めてプーナにやってまいりましたが、そのときわたくしの博士(Ph・D)論文の完成はおろか、その出版まで夢みることすらありませんでした。何となれば、実際、当時のわたくしは英語の一文すらを充分に話すことができなかったからです。しかしながら、バパット先生の熱心なご指導のおかげで、また、ここにいらっしゃいます皆さま方の暖かいはげましのおかげで、今日の良き日を迎えることができました。

海を渡ってインドへやってきまして、まさにこの「ブラフマ・カマル」という花（小著を掲げながら）を看ることができました。わたくしの心からなる希いは、インド学の分野でプーナと日本をかけわたす一つの小さな橋になることができればということであります。

ありがとうございました〕

前夜、何回も挨拶文を声を出して練習したにもかかわらず、スピーチの途中、言葉がとぎれました。論文完成に費やした七年の星霜が、またインドの青春を燃やし尽くしたという感激が、思わずわたくしの目頭（めがしら）を熱くしたのでした。

（つづく）